

## 編

## 集

## 後

## 記

○本号では米ソが収録された。五十嵐博士の帰国は早かったが、お話を聞く機会が遅くなり、丁度ソ連の漁業視察と同じ頃になってしまった。余市の北水研では大垣所長をはじめ佐藤、平野の2氏がソ連帰り、五十嵐氏がアメリカ帰りとのところ2大潮流が一緒になってしまった。学問的にはどうということではあるまいが、お互に個人的な印象や感じがあるから、これは容易にコントロールされはしない。然しともあれ今後共大いに外の空気にもふれてわれわれの一知半解を解脱させてほしいものである。

○15日視察団は千歳支場を訪れ、場長および柴田支場長の説明をうけたが、場内を一巡して、孵化室では孵化盆と孵化槽のないのを余程不審に感じた模様で、孵化室の屋根裏を確かめたりするに至った。また、1盆2,500粒の単位で、孵化室の容量を説明したのも容易に納得されず、微笑苦を誘ったが、にじますを何故親にして売却しないかとの疑問も国柄が違うためか種用または稚魚で配布し民間事業を育成するということが氷解されず、場側としては苦笑の訪問となり、談笑裡に約1時間の視察を終った。

○光電管と計数管を利用しての卵の計数器は前号の紹介に続いてのもの。中島氏の発表と

併せて末武氏の意見を添え諸君の便宜をはかった。専門家の意見では容易に利用出来そうで、金額もそう大きくはならないようである。こうした研究が多いに育てられれば今後に益するところも又多かるう。結局は研究といい、進歩というも、それを培うだけの体制なり、雰囲気なりがあつて生長する訳で、折角のアイデアをのばすようにしてあげたいものである。

○10月13日以降「全国内水面湖沼河川養殖研究会」と「本州鮭鱒孵化講習会」とが、同日、同地で開催された。前者は伝統のある全国会議であり、後者も初めての試みであるだけに、関係者からも重視された。本誌もこの機会に広く参会の関係者に意見を求めたいと思い、それに併せての企画ももつた。その紹介は後日本誌を通じて集録させて頂く予定。

○定期刊行物が、定期に出ないのはまことに無意味で、編集委員としてもその責を痛感しております。別に原稿やその号と时期的な関係といった編集上の問題ではなし、全く担当する私達の「しない」という理由だけなので申訳けなく、又御投稿下さる各位の原稿のその号の方針によるずれによる未載とともに併せてお詫び致します。

一鉄一

「魚と卵」編集委員会

農林事務官 秋庭鉄之 技術吏員 大東信一  
農林事務官 佐々木正夫 技術吏員 大屋善延

札幌市外中の島(TEL ④ 211)

発行 北海道さけ・ますふ化場 場長 荒井定治  
北海道立水産孵化場

印刷 中西写真製版印刷株式会社